えんだより

かんさいだいがくようちえん

2016 9/20 No12

「楽しいつどい」と名付けた集会を、年に４回持つことを計画し、主に芸術関係のものを通して子どもたちの感性に働きかけたいと考えています。子どもの感性を豊かに育てるために・・・と、その働きかけ（育むための刺激）には様々な手段があると思います。私たちは「楽しいつどい」を計画するにあたって、“子どもの発達段階を考慮し過度な刺激にならないようにすること”と、“子どもが身近に感じられること”の二つを大切に考えています。今年度は、狂言（年長・年中児のみ）・クラシックギター演奏・男声合唱・リコーダー演奏をとおして、子どもたちの感性に働きかけようと思っています。

第１回　楽しいつどい

～「狂言」昔の劇を楽しむ～

1．「狂言」という昔のお芝居について
2．演目「蚊相撲」・・・大和座の皆さん
3．出演者の紹介
4．発声指導　・・・　安東伸元師

狂言は対話を中心としたせりふ劇で、大がかりな舞台装置は用いず、言葉や仕草によってすべてが表現されます。大きな特徴は、「笑い」です。中世の庶民の日常や逸話を題材に、人間の習性や本能をするどく切り取って、大らかな「笑い」や「おかしみ」にしてしまうというものだそうです。

言葉は子どもたちが普段つかっている言葉遣いではありませんし、幼児に狂言の「笑い」や「おかしみ」を理解するのは難しいかもしれません。言葉も衣装も立ち振る舞いも現代のものとはかけ離れています。けれど、話の流れや言葉のニュアンスをつかみ、子どもたちはお話に引き込まれていきます。それはなぜか？というと、「驚き」があるからだと以前安東師に教えて頂きました。大きな声や音で驚かすということではなく、【“感動”になる前の心の動き】【心を揺さぶること】があるから、子どもたちは集中するのだと私は師匠の言葉を理解しています。

９月１３日・・・

おなかの底から発声させる声は、マイクを使わなくてもホールの隅々までとてもよく聞こえました。会が始まってしばらくは、その声（声の大きさというよりも、声の重みというか押し寄せるような響き）に戸惑う子どもたちでしたが、それもまた貴重な体験だったと思います。

人間の姿をした蚊の精と大名が相撲を取る場面や、太郎冠者の知恵を借りながら相撲を取るところに子どもたちは「笑い」や「おかしみ」を感じるのかと思いましたが、子どもたちが一番大笑いしたところは、行司の「はっけよい、のこった！」の動きでした。会話が古典の表現なので、お話の内容をしっかりと理解して楽しむことは年中児には難しいようでしたが、聞いているうちに耳慣れていく様子の年長児は、想像力を手伝わせてよく見ていましたし、言葉のニュアンスをつかみお話を理解していく集中力に成長を感じました。

年少児には、来年のお楽しみにしたいと思います。

会終了後、大和座の皆さんとお話させて頂く中で、「闇」についての話になりました。現代の環境では「漆黒の闇」を体験することはないということから、安東師が、『知らない世界がある限り、経験したとは言えませんね。』と一言。あまりに深い言葉に私は一瞬絶句していましました。が、それは大人への啓蒙であると理解しました。いろんなことを経験して生きてきたつもりでいる私たち大人は、もしかすると自分の尺度や考え方で、ほとんどのことが解決するように思っているけれど、知らない世界に置かれた瞬間、今までの自分の力は何ひとつ役には立たないでしょう。驕ることなかれ。この世に対して謙虚であれ。そう戒められた気がしました。